カタクチイワシ対馬暖流系群の資源評価について

長崎県総合水産試験場　漁業資源部　海洋資源科

はじめに

カタクチイワシ（対馬暖流系群）は、TAC候補魚種として検討が進められており、その管理目標については、国の水産資源研究所が関係府県と共同して行う資源評価結果を基に提案がなされます。最新の資源評価結果は令和三年九月に公表されています。

カタクチイワシ対馬暖流系群について

カタクチイワシは日本周辺に広く分布しており、このうち東シナ海から日本海側に分布する群を対馬暖流系群と称し、沿岸域から沖合域にかけて広範囲に分布していると考えられています（図１）。

図１．対馬暖流系群の分布域

（水産研究・教育機構より）

漁業の状況について

本系群の成魚は、日本海北区では定置網、日本海西区では大中型まき網・中型まき網・定置網、東シナ海区では中型まき網が漁獲の主体となっています。なお、仔魚は主に熊本県や鹿児島県の沿岸域において、シラス漁業により漁獲されています。

本系群のシラスを除いた漁獲量は、一九九七年を除いて一九九六～二〇〇〇年には十万トンを超えていたものの、二〇〇一年に急減しました。その後、二〇〇五～二〇〇八年にかけて再び九万トンを超えるまで増加しましたが、二〇〇九年には再び急減し、二〇二〇年まで四～六万トンの範囲で推移しています（図２）。なお、漁獲量の変動は、本県を含む「東シナ海区」よりも「日本海西区」で大きくなっています。

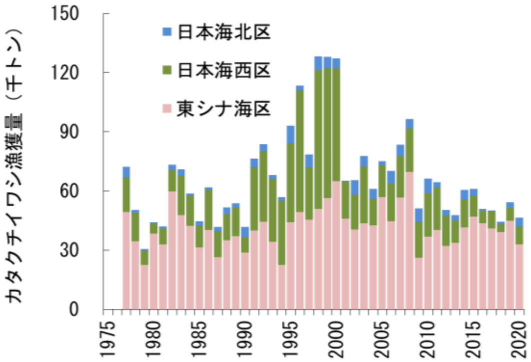

図２．海区別漁獲量

（水産研究・教育機構より）

また、本系群のシラス漁獲量については、二〇〇五年前後に一万トン近くまで増加しましたが、二〇〇八年以降は減少傾向にあり、二〇二〇年の漁獲量は〇・四万トンとなっています。

対馬暖流域に分布するカタクチイワシ

は韓国及び中国でも漁獲されています。韓国の漁獲量は、近年二〇万トン前後で推移しており、二〇二〇年の漁獲量は二二万トンでした。また、中国による漁獲量は日本や韓国より多く、直近でデータが利用可能な二〇一九年の漁獲量は六三万トンとなっています。

資源の状態について

令和二年度まで、本系群ではシラスの漁獲量を含めて資源評価を行っていましたが、シラスを含めていない太平洋系群と整合性を図るとの理由から、令和三年度から基本的にはシラスを含めずに資源評価がなされています。

本系群の資源量は、一九九八年に四二・六万トンと最高値を示しました。その後は減少に転じ、二〇〇一～二〇〇五年は一九万トン前後で推移しました。二〇〇七年に三〇・二万トンまで増加しましたが、以降は緩やかに減少傾向にあり、二〇二〇年は一二・七万トンと推定されました（図３）。

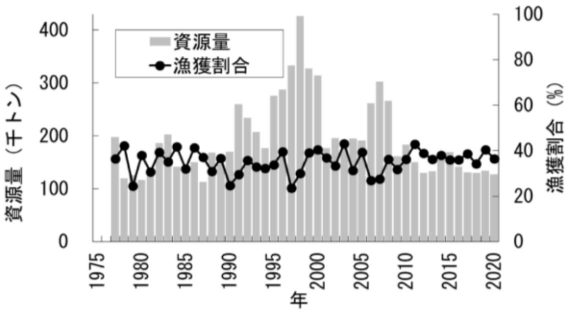

図３．資源量と漁獲割合の推定結果
（水産研究・教育機構より）

将来の漁獲量について

ここまで、本系群のベースケースの資源評価結果について紹介してきましたが、シラスの漁獲あるいは韓国の漁獲を考慮するか否かなど、資源評価を行ううえで議論すべき事項が残されています。そのため本系群では、異なる条件設定の七つの漁獲シナリオが示されています。

七つのシナリオのうち、シラスを含めないベースケースでは、二〇二二年からＴＡＣ魚種となった場合、二〇二〇年の漁獲量四・六万トンに対して、安全性を考慮したうえで将来期待される平均的な漁獲量は、二〇二二年に一度減らした後に、五・一万トン前後になると予測されています（図４）。

単位：千トン

β	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2042	2052
1.00	46	53	40	51	52	52	52	52	52	52	52	52	52	52	52
0.90	46	53	38	51	52	52	52	52	52	52	52	52	51	51	51
0.80	46	53	36	50	51	51	51	51	51	51	51	51	51	51	51
0.70	46	53	33	49	51	51	51	51	51	51	51	51	50	50	50

図４．将来の漁獲量（水産研究・教育機構より）

おわりに

カタクチイワシ対馬暖流系群は、漁業者や関係者が自由に参加出来る資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会議）の第一回目が令和四年三月三日に開催され、資源評価結果について議論がなされたところです。令和四年度中に第二回目の検討会が開催される予定となっています。

※わが国周辺の水産資源の現状を知るために
（http://abchan.fra.go.jp/index.html）

※令和３（２０２１）年度カタクチイワシ対馬暖流系群の資源評価

（担当　山田　雄太）